引喩と暗喩

――源氏物語における白氏文集、「凶宅」など

中西　進

一　凶宅―夕顔

白楽天が文集第一巻におさめる「凶宅」なる諷諭詩は長安の都にある大邸宅が空しく朽ちはててゆく様子を捉え、これを買う人が少ないのは災いがおこることを恐れるためだとして、禍のよって来るところを考えない愚かさを悟らせようとしたものである。

このことを詳しく言うと、長安の街の西東に大宅が多くつらなり朱門を構えているが、房廊があい対して今や空しく、

梟鳴松桂枝　狐蔵蘭菊叢
蒼苔黄葉地　日暮多旋風

という状態となっている。かつてここに住んだ者は将相だったが凶庸に流されたり、公卿だったが病没したりして、次々と四五代の主に殃禍がつづいた。そこで、

風雨壊簷隙　蛇鼠穿牆墉

ところとなり、日々荒廃がひどくなっている。

これに対する世人に向かって白氏がいうところは、かくなった原因である。すなわち、高官の者は収入も多く高い地位を得てはいても権力は長く保つことがむつかしく、勢力はすぐにつきてしまう。驕りも長寿も物の究極なのだから、これらがつねに身をせめ、誰も身を全うすることができない。

これは人間のみならず国家においても同じで、周も秦も崤函の地にあったが、一方は八百年を保ち、一方は二代の帝王で終った。つまりは家も国も人が凶なのであって家が凶なのではないのだ。白楽天はそう語る。

ところで、この「凶宅」を源語が引用したという指摘が『岷江入楚』に見える。

文集第一凶宅詩……梟鳴松桂枝狐蔵蘭菊叢蒼苔黄葉地日暮多旋風（賦）

と。そして以後の諸注もこれを踏襲する。

引用の個所は「夕顔」、源氏が夕顔をともなって「なにがしの院」に到り、夜半物の怪によって夕顔が殺されることになる、そのあたりで、すでに冷え入った体を抱きながら急ぎ惟光をよびに人をやった後、

夜半も過ぎにけんかし、風のやや荒々しう吹きたるは。まして松の響き木深く聞こえて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、梟はこれにやとおぼゆ。

とある個所である。また先立っても、うつぶせになっている夕顔を見て、

荒れたる所は、狐などやうのものの、人をおびやかさんとて、け恐ろしう思はするならん。

と源氏がいい、水野氏はここも加えて引用を指摘している（一七七ページ）。

そこで果して源語が白詩を引用したのかどうかが問題となるだろうが、「風のやや荒々しう吹きたるは」とはこの音によって夜半の過ぎたことを確認した趣であり、これは白詩の「日暮多旋風」と同じ内容と考えられる。ついで「松の響き木深く聞こえて」とは梟が「松桂枝」に鳴くという構想とひとしく、その上に「鳥のから声に鳴きたる」を梟と受止めているのは、そのまま「梟鳴松桂枝」を引きうつしたものであろう。

この点においてもっとも白詩の意識を顕著に語るものは「梟はこれにやとおぼゆ」という表現である。怪しげなしわがれ声で鳴いた鳥に対して「梟とはこれだろうかとお思いになる」（古典全集本）とは、「あの梟というもの、聞き及んでいる鳥とはこれか」という口吻である。よし、唯一白詩に限らないとしても、これは他の見聞――おそらく漢籍とあい対する表現であろう。

その上に「荒れたる所は、狐などやうのものの」という表現は梟の句と対をなす「狐蔵蘭菊叢」を意識したものと思われる。この蘭菊叢といわれた庭園のさまは次に「蒼苔黄葉地」また上掲のように「風雨……」と語られるが、また先立っても、

往々朱門内　房廊相対空

と描写される。これに対する源語の描写は、

荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く露けきに、簾をさへ上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。

いといたく荒れて、人目もなくはるばると見わたされて、木立いと疎ましくもの古りたり。け近き草木などはことに見所なく、みな秋の野らにて、池も水草に埋もれたれば、いとけうとげになりにける所かな。別納の方にぞ曹司などして人住むべかめれ

ど、こなたは離れたり。

という。この荒廃ぶりは十分に狐を蔵したものとしての菌菊の叢や蛇鼠が出入りする牆墉を想像させるだろう。右の「秋の野ら」は引歌があり、

里は荒れて人は古りにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる

僧正遍照（古今集秋上）

がそれである。要するに描写は「人は古りにし宿」のものであった。そしてこの自然にまじって別納が離れてあるさまは、白詩が「房廊相対空」と歌うところとひとしいものがある。

ところで、この「なにがしの院」が源融の河原院をモデルとしたものだという説がある（河海抄）。謡曲「夕顔」が、

ここは旧りにし融の大臣の住み給ひし所なるを

というのも、その伝承によっているであろうが、融の死後昇が伝領、宇多上皇に献上した広大な邸宅も、十一世紀のころには荒廃に帰していたらしい。「夕顔」に描かれた荒廃と通うものがあったであろう。それはそのまま「凶宅」の荒廃ぶりでもあった。

のみならず融は左大臣であり「凶宅」が「前主為将相……後主為公卿」というのと、よく通じ合う。河原院は京極大路と万里小路との間を占め、また六、七条両坊門の小路に挟まれる八町を領していたというから、大臣にふさわしい「大宅」（凶宅）であり、「街西東」に在ったことになる。

そして「凶宅」は、

連延四五主　殃禍継相鍾　自従十年来　不利主人翁

というが、河原院も宇多上皇が寵愛した褒子を住まわせたところ、融の怨霊が現われたので七か寺における諷誦を行なったという（延長四年、九二六）。怨霊の出現などの殃禍に悩まされたというべく、比喩的にいえば「人疑不敢買」（凶宅）ということになろう。

源語が書かれた頃は、まだ河原院は寺として存在していたようだが、昔日の繁栄には比ぶべくもなかったであろう。そのような「大宅」を白詩の「凶宅」になぞらえることはごく自然と思われ、作者は単に河原院をのみ「なにがしの院」として借りたのではなく、「凶宅」を河原院に連想し、その上で「凶宅」詩を借用したのではないかと考えられる。

それでは、「夕顔」における「凶宅」の引用を認めたとして、引用はどのような意図によってなされ、その結果どのような効果をもたらしたのであろうか。

もし「夕顔」の背後に「凶宅」がないのだとしたら、先に掲出した「荒れたる所」の狐や「気色ある鳥のから声」はそれだけの景物になってしまうだろう。たしかにそれだけでも十分「なにがしの院」の荒涼たる様子は知られるであろうが、ただ荒廃のさまでしかない。

それに対して、上にも述べたように敏感な読者が「梟はこれに

や」という口吻に気づき、さて何を引合いとしているかを考えて「凶宅」に思い到るとすれば、情況は一変するであろう。

また「秋の野ら」が蔵す引歌から、ここが「古りにし宿」だと気づき、その延長線上に中国の「古りにし宿」すなわち「凶宅」をたぐり寄せてくることがあったとすれば、「なにがしの院」という「古りにし宿」はたやすく「凶宅」と重なって、世界を広げたであろう。

その世界とは、単なる荒廃の家から不吉な家へと変容した世界である。そうでなければ夕顔がなぜ殺されるのであろう。殃禍にみちた家に宿ったがゆえに殺されたのが夕顔だったことにはならない。

いや、一歩を譲って夕顔を殺した物の怪の発想源が融の霊だとしよう。すでに葵子に対する融の霊のことは述べたが、さらに『今昔物語』（二十七巻二話）によると宇陀院の前にも融の霊は装束正しく大刀、笏をとって現われたという。院が事の次第を語ると霊は消えた。

「なにがしの院」が河原院にすぎない時でもこれほどの霊の働きは着想しえるのだが、しかし、一般には「宅凶」として人々から恐れられ、白楽天が「人凶」として恐れた凶宅のゆえだという認識に、源語の作者が到達していないことになる。

それとは異なって「凶宅」を背後に秘めた作者の意図には、宅凶とも人凶とも思える凶宅の告知がもくろまれていたにちがいない。

宅凶からいえば、たしかに河原院は六条にある。「夕顔」の冒頭が「六条わたりの御忍び歩きのころ」と始められ、そこには御息所の姿がちらつく。しかもその京極の河原だという院の設定までふくめて、六条がもつトポスは隠微な形で「夕顔」全巻に翳を与えている。この陰翳あるトポスから、融が働きかけてくる。上掲の今昔を読むと、院の「お前は融か」という問に答えて、

家ニ候ヘバ住ミ候フニ、此ク御マセバ、忝ク所セク思ヒ給フルナリ。

という。融の霊は院を家として住んでいるのであり、ボルターガイストとしての融の霊が、ここには感じられる。これを源語の作者も否定してはいない。

しかし宅凶を皮相のことだと白楽天がいったように、さらにその根底には人凶がある。『大鏡』（二巻基経伝）によれば陽成院退位の後に、時に左大臣だった融は「位につかせ給はむ御心ふかくて」、「いかがは。ちかき皇胤をたづねば、融らも侍るは」といい出したという。基経がこれを阻止したという手柄話ではあるが、融が嵯峨天皇の皇子として（母は大原全子）、即位まで考えていたことになる。

これは楽天のいう人凶であろう。上にもふれたように、彼は、

凡為大官人　年禄多高崇　権重持難久　位高勢易窮
驕者物之盈　老者数之終　四者如寇盗　日夜来相攻

という。この四者を多くの注解は年・禄・権・位とするが、ととの

わない。権・位・驕・老がそれで人間の煩悩として身をせめるものをいうのであろう。楽天はこうした人間の性によって「孰能保其躬」、身を滅ぼすのだという。これが先立って楽天の「禍所従」なのである。

河原院の住人も、この「禍所従」の権勢欲を捨てることができなかった。そのために河原院は荒廃したのであり、院そのものに凶があるのではないというのが、楽天の思想を河原院にあてはめた結果であろう。その河原院を「なにがしの院」として借りたのが源語の作者であった。

この作者に、高官の者が辿るべき運命への批判があろうではないか。もし「凶宅」を重ねたことを認めるとすれば、重ねるという行為は、高官の者が身を滅ぼした凶宅において、一人の女性が家霊によって落命したという訴えに他ならない。

われわれは光源氏が融と同じく皇子であり、将来高位高官への道を歩くことを皆知っている。その人間の当面した事件が高官者の霊の恐ろしさだった。光源氏は自らの身を二分してわが分身を見つめていたといってもよい。少くとも読者は、そう読むことを仕組まれているのである。

光源氏が一人の美女を失った。その「禍所従」は権勢欲にあった——そう語ることが「凶宅」の引用にかかわる意図だったと、私には見える。

二　凶宅—蓬生

「凶宅」はもう一か所「蓬生」の中に引用される。これも『岷江入楚』所引の『河海抄』『弄花抄』に見えるものである。

白氏文集凶宅詩の心也　夕顔の巻にあり（河海抄）

梟鳴松桂枝狐蔵蘭菊叢といへる詩心の心也此詩も荒たる所の心也松桂蘭菊に梟狐なとのすむへきにはあらぬよし也（弄花抄）

また『源氏物語聞書』『一葉抄』も引用を指摘するが、近代の研究では必ずしも一致して引用を認めるのではない。大系本、古典全集本いずれも引用にはふれず、古沢氏もひとしい。ただ丸山氏（一〇五ページ）、水野氏（一七七ページ）は引用とする。

引用が指摘されるところは末摘花が光源氏の須磨流謫後も邸を守るくだりで、

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の住み処になりて、うとましうけ遠き木立に、梟の声を朝夕に耳馴らしつつ、人げにこそさやうのものもせかれて影隠しけれ、木霊など、けしからぬ物ども、ところ得て、やうやう形をあらはし、ものわびしき事のみ数知らぬに……

とある。

たしかにこれだけを見て引用の有無を判断することはむつかしいかもしれぬ。しかし末摘花のいる邸は右に「宮」とよばれているよ

うに常陸宮という大守のいた邸で、これまた長安の「大宅」に相当する。将相・公卿の類の住居である。そこに限って狐と梟とを並べて描写することは、用意のあるものではないか。

実は、邸の荒廃は「蓬生」一巻にちりばめられたかの如く描かれる。

しげき草蓬をだに、かき払はむものとも思ひ寄りたまはず。浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる。葎は西東の御門を閉ぢ籠めたるぞ頼もしけれども、崩れがちなるめぐりの垣を、馬牛などの踏みならしたる道にて、春夏になれば、放ち飼ふ総角の心さへぞめざましき。

八月、野分荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どもの、はかなき板葺なりしなどは骨のみわづかに残りて、立ちとまる下衆だになし。

柳もいたうしだりて、築地もさはらねば、乱れ伏したり。漏り濡れたる廂の端つ方おし拭はせて、……

月入り方になりて、西の妻戸の開きたるより、さはるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りなければ、いとはなやかにさし入りたれば、……

邸が蓬生なのだから当然といえばいえるが、こうした荒廃ぶりは、やはり上掲の「房廊相対空」とか「風雨壊簷隙　蛇鼠穿牆墉」とかを連想せしめるだろう。

こうした状態だから惟光が入ってくると、

もし狐などの変化にやとおぼゆれど、近う寄りて、……

ということになる。右の荒廃が惟光という狐を蔵しがちだったといってもよい。

こうしてみると、直接に指摘できるところはあいまいであったにせよ、「蓬生」全巻に「凶宅」のイメージが漂っていることを、認めてよいであろう。いやむしろ「夕顔」の巻には乏しかった建物への注目はこちらの方に多く、語るに熱心だったと思える。なまじ一か所に漢籍を背負わせなかった方が、印象を強くした面もある。

それでは作者は、なぜこのような引用をしたのか。

そもそも末摘花が光源氏の前に登場するのは、夕顔を忘れがたく思っているさ中であった。「末摘花」の冒頭は、

思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思し忘れず、ここもかしこもうちとけぬかぎりの、気色ばみ心深き方の御いどましさに、け近くうちとけたりし、あはれに、似るものなう恋しく思ほえたまふ。

と始められる。そんな折、故常陸の親王の忘れ形見としての末摘花の消息を聞いたのだった。そこから源語は光源氏の流謫という大事件をはさんで八巻ほどの物語を用意しているが、実はこの末摘花物語は当の「蓬生」にひきつがれる。

まさに秘匿した「凶宅」のコンテキストは夕顔から末摘花という、

ともに傍流にいる女の間を流れるのである。末摘花は終始光源氏の愛をうけるにしても、物語の中心に位置する藤壺、紫の上、葵の上、女三の宮といった流れとは別個の傍役の一人である。そして夕顔はその名さえ知られずに消えてゆき、末摘花は醜という陰をもった女性として配置される。はかなさとか醜さとか、人間の〈負〉性を分担するものとして登場する女の間に作者の用意したものが「凶宅」の舞台であった。

いわでものことだが「末摘花」の

いといたう荒れわたりて、さびしき所に、さばかりの人の、古めかしう、ところせく、……

荒れたる籬のほどうとましく……

上もなくあばれたれば、日の脚、ほどなくさし入りて、……

などを引きつぐものが、上掲の「蓬生」の描写であった。

それでは「凶宅」は、こうした荒廃をいうためにのみ引用されたのであろうか。「蓬生」に散りばめられたのであろうか。

そうではあるまい。しかしまた「夕顔」のように凶＝不吉さをいうために散りばめられたのでもあるまい。

思うに「蓬生」における「凶宅」の利用は、その過去性にあった。「凶宅」とは不吉な家宅という意味だが、題材として用いられたのは過去に栄華を極めた将相・公卿の住宅である。その栄華が久しゅうし難く、また窮りやすく荒宅となっていくことが題材であった。

今の末摘花が住む世界も、過去の栄華を背負った世界で、その暗示として「凶宅」が用いられたと考えるべきであろう。源語の作者たるものが〈栄華、その後〉をテーマとしないはずはない。

彼女によれば、栄華は空しくすぎて、後に残るものといえば狐と梟、そして破屋。またその中に住んで琴という古風な楽をたしなみ、「古代のゆゑづきたる御装束」を着、「ひなび古めかしう、ことごとしく儀式官の練り出でたる肘もちおぼえて」いる女が末摘花である。「凶宅」に語られた荒廃は、心理の上に移動させられたというべきだろうか。およそ人からは憐憫しか買わない挙措を、〈その後の荒廃〉といってよいだろうか。

誤解を恐れながらいえば、一体この醜女をなぜ常陸の親王の娘と設定したのか。どこにでもどのような筋にでも設定できたろうにかく登場せしめたのは、大宅の荒廃の中にこそ処を得る女性を醜女と設定したのではないか。およそ人間ばなれした末摘花を「凶宅」を舞台とする世界に据えたのは、彼女を狐狸の類に通うものとしたのであろうか。

もしこんな比喩を誤解なく受取ってもらえるとすれば、〈栄華、その後〉にこめられた作者の目の、何と鋭く仮借なきことか。常陸の親王がいかに優雅に宮を築こうとも、死してしまえば、後に残るものは邸宅の荒廃と、まるで狐狸のごとく細々と住み、容貌まで人間ばなれしてしまう女だけなのだという作者の観察を、われわれは

ここにまざまざと見せられてしまうのである。

三　議婚―帚木

文集所収（巻二）の「議婚」は結婚の様子を述べて世相を批判した諷諭詩である。すなわち白氏のいうところによると耳に快ければそれが正しい音楽となるように、見た目にきれいなら美人と思うにすぎない。さらに美醜は大した差がないが、貧富には大きな差があり、富家の娘はたちまち結婚し、貧しい家の娘はなかなか結婚できない。

そこで早くとついだ富家の娘は夫を軽んじ、晩婚の貧しい家の娘は姑に孝養をつくす。あなたはどんな意味で結婚するのか。

この詩の中に、貧富二つの人生を宴会に披露するくだりがあって、

聴我歌両途

と白氏はいう。

一方これを用いて物語を進めるのが源語である。「帚木」。例の雨夜の品定めとよばれる中の一節で式部丞が博士の娘との経験を語るところである。式部は娘がいかに賢く有益であったかを語り、さてその当初に式部が通うのを知った博士の態度を、

親聞きつけて、盃もて出でて、わが両つの途歌ふを聴けとなん、聞こえごちはべりしかど、……

と描く。

これは博士が人に聞こえるように「わが両つの途歌ふを聴け」とつぶやいたというのだから白詩そのままの口吟で、引用であるか否かを問題にする余地はあるまい。「盃もて出でて」というのも、

主人会良媒　置酒満玉壺　四座且勿飲　聴我歌両途

というのだから、白詩をうけた表現である。主人公も博士、式部丞も文章生だったころと語り、娘についても、

才の際、なまなまの博士恥づかしく、すべて口あかすべくなんはべらざりし。

寝覚めの語らひにも、身の才つき、おほやけに仕うまつるべき道々しきことを教へて、いときよげに、消息文にも仮名といふもの書きまぜず、……

その者を師としてなん、わづかなる腰折文作ることなど習ひはべりしかば……

とことばを尽くして漢才をあげているから、全体の文脈の中で白詩の口吟はごく自然である。

白楽天が「議婚」を作ったのは元和五年（八一〇）ごろとされており、時に三十九歳、前年には娘も生まれているが、光源氏は十七歳、雨夜の品定めがしばしばそういわれるように源氏の恋愛生活の出発期で、文字どおり婚を議することは、この長編物語の進行上からも自然な段階であった。全体の構成上からも、ここに「議婚」をもち込んだ適切さは、評価されるべきであろう。

さらに古沢氏は両途云々の一句のみならず品定め全体に「議婚」がかかわっているとして思想上の一致を指摘する（一〇〇―一一九ページ）。そして先立つ左馬頭の発言の「富貴必ずしも取らず」とするくだりの、「議婚」冒頭の「天下無正声……富為時所趨」との類似、「実意第一たるべし」とするくだりの「緑窓貧家女……臨目又踟躕」との類似、「浮気多情」な木枯女のさまの「紅楼富家女……已嫁不須臾」との類似をもあげる。

これを認めれば、そもそも「雨夜の品定め」という一項を設定したこと自体が、結婚とは何かという「議婚」の主題に負っていたこととなり、「議婚」の存在が源語の筋を決定したとさえいえる。

ただ、古沢氏は両者がまったくそっくりだというのではない。そこには相違もあるとし、「議婚が専ら貧富の対立下に実意第一主義の立場を取って居るのに対し、源語は」「品等論・中庸論（過不及論）」をとり、さらには紫式部の「自像の投影」もあるという。これを認めると婚を議することのみならず、その婚の理想を述べたことになり、白詩の利用は筋のみならず語り手の主張の上にも関係していることになる。「議婚」一編の利用を、かく重要と考えてよいであろう。

そこで、限定してこの博士の娘の場面と「議婚」とを考えてみると、古沢氏のいうように「議婚」は貧富を問題としており、その上で貧家の娘がいかによいかをとく詩である。

ところが源語の方は一切貧富に関係しない。

源語は博士が「わが両つの途歌ふを聴け」ということによって、むしろ自分が貧しいのだということを表明することになる。その上で娘が「議婚」によって性格づけられてゆくことになる。すなわち形式的にいうと娘は「寂寞と暮して来て二十歳も過ぎ、安上がりの荆の実のかんざしをつけ、着物には真珠の飾りもつけていない。今まで何度か縁談もあったけれどもひっ込み思案にすぎて来た。だから婚期を逸してはいるが、嫁すると姑には孝養を尽くす」娘なのだと、父親がいったことになる。

源語の作者はこうした裏側の文脈を用意したのだが、さてその上で表面的に語られる博士の娘は、公事にも通じ、私生活上の心くばりも周到で、学問の才はなまなかの博士以上のものがあるという。

また、心をこめて世話をし、寝ざめにも学才のあることばを口にし、公事の教養を教え、仮名を使わない手紙をりっぱな筆跡で書き、もっともらしい言い方をする、という。

だから「なつかしき妻子とうち頼まむには」恥ずかしくなるというのだから、いかにも大仰な、人間の情を心得ない女が、博士の娘だということになろう。その上に白詩を通して貧困が加わったとしたら、学才を身につけた女には愛が絶望的である。

この徹底的な学才ある女への批判、皮肉を何人も源語の作者の自己嫌悪だと受取ることに異存はないであろう。すでに古沢氏が「自

像の投影」だといったことを肯って余りあるものがある。

その上、白詩は貧なる女がよいというのだから、白詩は否定的に引用されたことになろう。「わが両途を歌ふを聴け」と口ずさむ父親は、娘をこのように愛に不向きとした当の張本人なのだから、そう口ずさむこと自体が、今揶揄されていることになる。

だから逆にいうと、源語作者の中に、

金縷繡羅襦　見人不斂手　嬌癡二八初　母兄未開口

已嫁不須臾

という状態をよしとする主張も、理解しなければなるまい。白楽天はこれを否定するのだが、むしろその中に人情の自然を見ていたのが源語であった。

しかし、白詩はこんな女のこととして、

嫁早軽其夫

という結果をあげる。これこそ先にあげた源語の博士の娘の長々とした描写の、反対である。源語の作者はこれに与しないであろう。自己嫌悪的に否定した博士の娘。そして一方羨しげにあげた富家の女が嫁して夫を軽んずるという結論。ここに二つながらの否定が出てしまえば、一体どのような女と結婚すればよいのか。

実はそれこそが「議婚」の果なさと重みを語るものであろう。もし源語が「議婚」を引用し、貧家の娘が「孝於姑」だとのみいうのなら問題は単純である。貧なる学才の女と結婚すればよいだけの話だ。しかし、白詩を批判することによって、源語の作者は「軽其夫」という結論をひきよせ、それを許容しないことによって堂々めぐりへと踏み出す。そこに雨夜の品定めという議婚の、一層の深みが生じたことになろう。

四　重賦―末摘花

白楽天の「重賦」（巻二）は本来民生を助けるべき税なるものが貪吏のために悪用され、人民が重税にあえぐ結果となり、一方官庫に物がうずたかく積まれるさまを述べた諷諭詩である。最後、その官庫の物もやがて塵と化するとする結論は激しい。疲弊した農民の姿を書き写してみよう。

歳暮天地閉　陰風生破村　夜深烟火尽　霰雪白紛々

幼者形不蔽　老者体無温　悲喘与寒気　併入鼻中辛

さて、これを引用するのが、源語「末摘花」の一節である。例の、末摘花の容貌に驚いた朝、車を門から引き出そうとして門番を探したところ老人が出て来る。老人の手にあまる門を供の者が手伝って開けると、

ふりにける頭の雪を見る人もおとらずぬらす朝の袖かな

幼き者は形蔽れずとうち誦したまひても、鼻の色に出でて、いと寒しと見えつる御面影、ふと思ひ出でられて、ほほ笑まれたまふ。

という。この「幼き者は形蔽れず」が「重賦」の一節の口吟であろうと思われて来た。

源氏の口吟が白詩そのままであり、ここから白詩の影響を消すわけにはいかないであろう。

それでは引用する必然性はどこにあったのであろうか。「幼き者は」ととり立てていうところは、それに先立つ「ふりにける頭の雪を見る人」と区別してのものであろう。つまり老人は朝の袖をぬらすのに対して、幼き者は形を蔽さない――はかばかしい衣服をまとっていない、ということになる（和歌の「……見る人もおとらず」とは「老人も自分に劣らず」と考えるべきである）。

この老人は先立って、

翁のいといみじきぞ出で来たる。……翁、門をえ開けやらねば、寄りてひき助くる、いとかたくなり。

と描写されるが、ともにひき助けるのは娘か孫かと思われる女で、彼女は、

衣は雪にあひて煤けまどひ、寒しと思へる気色ふかうて、あやしきものに、火をただほのかに入れて袖ぐくみに持たり。

とされる。

この中には老人の描写が直接出ては来ないが、この「いみじきぞ」の中に、ひどく年老いて無力で、貧相な様子がにじみ出ている。これこそが「老者体無温」で、女のこととして語られてはいても、「火をただほのかに入れて袖ぐくみに持」つ姿は、要するに「体無温」だからである。

その老人に対して女の方、つまり幼き者は雪に濡れて煤け、寒々とした衣服をまとっており、そのことは直接白詩の引用に託して口吟したのであろう。源氏の和歌と口吟は、白詩をこうして二分して応用したものだと思われる。

したがってこの部分における白詩の応用を、門番が娘とも孫ともつかない若者といっしょに出て来たことに引かれてのことだと考えることもできよう。ちょっとした思いつきとして、気のきいた語りが出来上がったことになる。ペーソスも加わったユーモアと見てもよいであろう。

しかし、根はもっと深く、鼻にかかわっているにちがいない。というのは口吟についで「鼻の色に出でて、いと寒しと見えつる御面影、ふと思ひ出でられて」とあり、この鼻は白詩に「悲喘与寒気併入鼻中辛」とつづくものを連想させるであろうし、さらにその上に、鼻を特徴とする姫君を思い出したという以上、この「幼き者」に末摘花のイメージが重ねられていると考えられるからである。寒さはおそらくこの下女の鼻も赤くしていたであろうし、その赤鼻が末摘花を導いてくるという趣向である。

すると末摘花も当然「形蔽れず」いなければならない。そのとおりに、彼女ははかばかしい着物を着ていない。だからこのくだりの

すぐ後で光源氏は、

黒貂の皮ならぬ絹綾綿など、老人どもの着るべき物のたぐひ、かの翁のためまで上下思しやりて、奉りたまふ。

ということになる。

林田孝和氏は末摘花を〈冬の女〉だという。この卓抜な意見は今問題にしているような衣服の問題をこえた、さらに深層の発想の形式をいうものだが、その末端の表現としても、「末摘花はまた、寒さに身を震わせている女性として語られる」ことを指摘する。

周辺まで広げると、末摘花は寒々とした世界に住みつづけている。

隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女ばら、白き衣のいひしらず煤けたるに、きたなげなる褶ひき結ひつけたる腰つき、かたくなしげなり。

というのが侍女たちであり、彼女たちは、

「あはれ、さも寒き年かな。命長ければ、かかる世にも逢ふものなりけり」とて、うち泣くもあり。「故宮おはしましし世を、などてからしと思ひけむ。かく頼みなくても過ぐるものなりけり」とて、飛び立ちぬべくふるふもあり。

と会話を交す。これらの一人が先の門番の女の、いでたちであった。

そんな中で末摘花自身も寒々といる。

痩せたまへること、いとほしげにさらぼひて、肩のほどなどは、いたげなるまで衣の上まで見ゆ。

とは痩身のことをいうにしても、やはり衣服が薄いゆえであろう。だから、例の「表着には黒貂の皮衣」を着ているのが滑稽だとしても、

げにこの皮なうて、はた寒からましと見ゆる御顔ざまなるを…

…

ということになる。

そして、すぐ気づくことだが、以後末摘花に「唐衣」がまといつくのも、ここからの文脈を引きずっているからであろう。

からころも君が心のつらければたもとはかくぞそぼちつつのみ

というのは源氏に裝束を贈った時の末摘花の歌であり、古典全集にも「からころも」が「きみ」につづく不自然さを指摘しているが、さらに先「行幸」の巻での玉鬘の裳着に際しての末摘花の歌も、

わが身こそうらみられけれ唐ころも君がたもとになれずと思へば

という。だから光源氏も、

唐ころもまたからころもからころもかへすがへすもからころもなる

と悪態をつくほどになる。いささか意地の悪いこの返歌は、それほどに衣服にかけて末摘花の特徴づけが行なわれているということである。

源氏が須磨から戻り、末摘花と再会する場面は、右に先立って

「蓬生」の巻で行なわれるが、ここでもまず末摘花は着るものが描写される。

大弐の北の方の奉りおきし御衣どもをも、心ゆかず思されしゆかりに、見入れたまはざりけるを、この人々の香の御唐櫃に入れたりけるが、いとなつかしき香したるを奉りければ、いかがはせむに着かへたまひて、……

この必然性も末摘花を特徴づけるものが衣服にあったことによっていよう。それは黒貂の皮衣に代表されるような時代遅れのわびしさにもあったが、もう一つ、いかにも貧相で寒々としていること、林田氏が〈冬の女〉とよんだ属性をもって登場せしめられていることにもよるであろう。

白詩の「幼者形不蔽」は、そうした文脈の中に導入されたものと思われる。

すると、〈冬の女〉としての伝統的な寒々しさの上に、白詩を重ねた結果としてのもう一つの寒さ、貧寒といったものが上塗りされて、末摘花の世界をいろどることになった。たしかに、上に引いた破村の風景——歳暮れて天地がおしせまり、陰鬱な寒々とした風が荒れはてた一帯に吹きまくり、夜もふけると火の気もたえて霰や雪ばかりが紛々と降り乱れるといった風景は、末摘花が住む故常陸宮の宮邸の風景であり、さながらに末摘花の心象風景でもあった。源語によれば、邸は「いといたう荒れわたりて、さびしき所」と描かれている。

「重賦」全体の重税にあえぐ農民の姿や貪吏また官庫に眠る富を導き入れることはなかったが、それでも常陸宮時代の栄華は、いま、

歳久化為塵

という結論と同じ状態にあろう。それを含めて、破村の描写が源語作者の利用範囲にあったと思われる。

したがって、末摘花の背景に、破村ともいうべき田園がしのびこむことになるが、しかしこれは、本来の末摘花物語の強調でこそあれ、余分なものの添加ではなかった。この女が常陸宮の娘として設定されることにおいて末摘花は田園と不可分のものなのだが、上記林田氏は師説、高崎正秀氏が「末摘花の女君もまた結局〈ひな〉の国から来た醜女」であったとする説をうけて「常陸をその名に負った末摘花も、ひなつ女のひとりであった」という。

だからここでいう常陸なる「ひな」は、醜に印象づけられる役割を担っており、かの「重賦」によって述べられた如き荒涼さと異質のものではない。白詩「重賦」を「幼き者は形蔽れず」から嗅ぎとった読者は、遥かなる常陸を破村の風景の中に想起したにちがいないのである。

五　傷宅—胡蝶

『源氏物語』は光源氏が三十六歳となった春、六条院の春の町での

遊楽を語る。池に龍頭鷁首の船を浮かべ、庭を柳、桜、藤、山吹がいろどり、女房たちは和歌を唱和しあって、まことにきらびやかな一日であった。たとえばその一節は次のごとくである。

他所には盛り過ぎたる桜も、今盛りにほほ笑み、廊を繞れる藤の色も、こまやかにひらけゆきにけり。

さて、この「胡蝶」の巻の一節に、『河海抄』（『岷江入楚』所載）は白詩を指摘する。

らうをめくる藤の色も

白氏文集　案中吟　繞廊紫藤架爽砌紅葉欄攀枝摘桜桃帯花移牡丹

これは「傷宅」（巻二）の一節をなぞらえたもので、「廊を繞る紫藤の架　砌を夾む紅葉の欄　枝を攀ぢて桜桃を摘み　花を帯びて牡丹を移す」という。なかんずく源語の「廊を繞れる藤の色」というところの共通を指摘したものであろう。

「傷宅」は冒頭に大邸宅を描き、ついで右の庭園の華麗さを述べ、さらに主人の富を語るが、しかし末尾、貧者への配慮のなさをなじり、やがて大宅も滅んでゆくだろうことを注意するという構成をもつ諷諭詩である。

そこで全詩から見ると右の一句はまことに部分的であり、果して引用と断定しえるか否か、問題がないわけではない。この問題をいかに考えるべきであろうか。

たしかに共通句は三語にすぎないが、源語のこの部分は、先立っても中国ふうな描写によって風景を語る。

龍頭鷁首を、唐の装ひにことごとしうしつらひて、楫とりの棹さす童べ、みな角髪結ひて、唐土（もろこし）だたせて、さる大きなる池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ国に来たらむ心地して…

…

とあり、明らさまに唐土だたせた状態を設定する。また「知らぬ国」とは神仙境のことであろう。後にこれまた白氏文集を引いて蓬莱のことが語られるから、こうした神仙境を読者に連想させようとした部分である。

さらに右の後、

中島の入江の岩蔭にさし寄せて見れば、はかなき石のたたずまひも、ただ絵に描いたらむやうなり。

と語り、この絵のようだという表現も、神仙をうけてこの世ならぬ世界、異国の風景を喚起させるものと見えるが、この中島の風景は先立っても、「胡蝶」の最初に、

山の木立、中島のわたり、色まさる苔のけしきなど、若き人々のはつかに心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる舟造らせたまひける、急ぎさうぞかせたまひて、おろし始めさせたまふ日は、雅楽寮の人召して、船の楽せらる。

とあり、唐ようの舟から眺めた風景なのである。

また、藤の記述の後にも、

まことに、斧の柄も朽いつべう思ひつつ、日を暮らす。

と、時の経つのを忘れる様子を、爛柯の故事によって表現する。こうしてみると当該個所は全体の状況を中国ふうにしたてた文脈にみちびかれて登場するものであり、さらに後に語られる中国ふうな故事によって挟まれた形となっている。その様子によって、「廊を繞れる藤の色」を、白詩の引用と認めることは許されるであろう。

そこで、ここに「傷宅」を重ねてみると「攀枝摘桜桃」という桜桃が源語の桜（上掲）を引き起こしているのではないかと思われてくる。桜と桜桃（さくらんぼ）が別であることはもちろんとしても、「他所には盛り過ぎたる」とわざわざ断ってまで、三月二十日の描写に入りこんで来る必然性は何であろうか。

あるいは後々、紫の上が描写されて、

気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。（野分）

花といはば桜にたとへても、なほ物よりすぐれたるけはひことにものしたまふ。（若菜下）

とあるように、紫の上が桜をもってたとえられる女性であったことも、理由の一つであろうか。もう一つ、この「胡蝶」に出て来る植物の山吹が玉鬘を連想させるものとすれば、紫の上はこの折の少し前に初めて玉鬘と会い、やがて玉鬘は「胡蝶」の巻に少しずつ中心を占める登場人物となり、源氏の懸想を紫の上も知るところとなる。こうした流れの中で桜・藤と山吹という区分によって登場人物のふり分けが配慮されることも、あり得るであろう。その上に桜桃は「傷宅」に登場するものでもあった。

しかし「傷宅」を引用した意図の最大のものは、藤の一句を手がかりとして読者がたぐり寄せる大宅の壮麗さでもあったろう。上述のように、作者は力をこめて風景が唐ふうであることを強調しているのである。そんな時、もう一つ加わって来た文脈の中に壮大な建物が展開すれば、おあつらえ向きではないか。

朱門大道辺　豊屋中櫛比　高牆外迴環　累々六七堂
棟宇相連延　一堂費百万　鬱々起青烟　洞房温且清
寒暑不能干

といった邸宅を白詩を知る者は源語に重ねることができた。何よりの唐ふうであろう。源語が庭園の描写ばかりをしたのは、一切建物の唐ふうは白詩に委任したというべきである。

しかし同時に、読者は大宅のその後もイメージの中にせおい込まなければならない。

不見馬家宅　今作奉誠園

という結語をも。馬家とは『新唐書』（巻一五五）の伝える馬燧とその子馬暢の家のことで、没落後宮廷の所有と帰し、奉誠園と名づけられた旧邸宅に子孫が住んだ。白楽天にとっては眉目の事柄であ

り、源語の作者にとっては二百年ほど前の出来事だった。

白詩を知る読者に、壮麗さだけを思い出せというのは無茶である。合せて没落をも思い出してしまうことは、源語の作者が引用を思いたった時に覚悟したはずだから、没落までを計算して「傷宅」の引用に及んだことになる。

いまわれわれが目の前にするこの「胡蝶」の美しい風景は、やがて滅びるべきものであった。すでに述べたように桜や藤がこの町の主人公、紫の上を比喩し賛えるべきものとして描かれているとしたら、この紫の上はもう一つ、滅びの分身をしたがえてここに登場していることになる。

すでに言うまでもなく、源語の大きな区切りは「藤裏葉」にあり、「若菜」以後新しい展開がある。それは紫の上においても同じで、「藤裏葉」以後、少しずつ苦悩をましていく。「若菜」に入ると女三の宮の降嫁問題があり、心は動揺するばかりか実際の夜離れもおこり、源氏との間の心も以前ほど安定しない。そのあまり出家を決意する。それが許されぬうちに発病、危篤という状態におちいり、人には死んだとさえ思われるほどである。「若菜」はこうした紫の上後半生の凋落をまざまざと語りつづける大冊（巻）であり、やがては「御法」での死を迎える。

こうした凋落が「藤裏葉」と呼びならわされる巻を最後として、まさに裏葉の後に起こることは、藤というものをシンボルとする運命の語り方を、源語の作者がもっていたことを示すだろう。

いやこういうと巻名にこだわるかの如き誤解を招くかもしれない。巻名を措いても、この巻の主要な主題たる夕霧と雲居雁との仲の許諾――物語を収束に導く事件は藤の宴において行なわれ、ふんだんに藤が登場する。

四月の朔日ごろ、御前の藤の花、いとおもしろう咲き乱れて……

わが宿の藤の色こきたそかれに尋ねやはこぬ春のなごりを

なかなかに折りやまどはむ藤の花たそかれどきのたどたどしくは

対の前の藤、常よりもおもしろう咲きてはべるなるを……

「藤の裏葉の」とうち誦じたまへる、御気色を賜はりて……

紫にかごとはかけむ藤のはなまつよりすぎてうれたけれども

たをやめの袖にまがへる藤の花見る人からや色もまさらむ

これらを最後の巻に描いた後、紫の上の凋落がはじまる。それをも予見せしめるものが「傷宅」の引用であろう。実は白氏文集（巻一）には「紫藤」なる一詩があり、これは他の物にからんでそれを滅ぼすものとして藤が歌われる。けっしてよいものではない。これもあの美しい藤の一面であろう。白詩をくわしく知る読者は、この連想からも自由にはなれなかったはずである。

目前の華麗さの陰に、こうした運命への見通しをさりげなく挿入

することが、源語作者における諷諭詩の引用だったと思われる。

六　不致仕―夕顔

同じく文集巻二には「不致仕」なる詩がある。年をとるまで官職を辞さないことを諷諭したものだが、まず七十歳で致仕するのがきまりだのに八、九十歳まで名利をむさぼり、曲がった腰で君門に入ってゆく。誰とて富貴君恩を欲するのだが、年とり名を遂げれば致仕すべきである。ただ賢明だったのは漢の疏兄弟だけで、後をつぐものがいない、という詩である。

源語の作者はこれに心動かされたのであろうか、しばしば一篇を引用する。引用を多く考えれば五回に達し、「長恨歌」「李夫人」につぐ数である。

その中の一つが「夕顔」に見える。

いとあはれに、朝の露にことならぬ世を、何をむさぼる身の祈りにか、と聞きたまふ。

というのがそれで、源氏が夕顔の家にやどり、朝を迎えて御岳精進らしく老人の声で額づき祈る声が聞こえてくる。立居もやっとという様子で行なっているのに対して、朝露にも似たこの世で何をむさぼり欲しての祈りだろうかと聞いておいでだというのである。

これに対し、「不致仕」の中には、

可憐八九十　歯堕雙眸昏　朝露貪名利　夕陽憂子孫

という一節があり、この第三句の類似が指摘されて来た。古沢氏、丸山氏また古典全集本もそうである。わずかな一句であり、その句も全体を引くのではない。またこの表現がごくありふれたものでもあり、引用を考えるのにいささか不安だが、果していかがであろうか。

ただ、朝露は文集以前から慣用された語で人生を朝露の如きだという（漢書、蘇武伝）。だから白詩のこの一句は「朝露のような、はかない世に名利をむさぼり」という意味となり、人生の晩ともいうべき晩年になってまで子孫のことを憂えるという次の句と一対になる。

すると源語の「朝の露にことならぬ世を」「むさぼる」というのと同じ内容となり、内容がひとしいことになる。だから「何をむさぼる身」というのも、当然名利を貪ることにちがいない。

しかも白詩が八、九十の老人というのに対して、源語の方も「翁びたる声に額づくぞ聞こゆる」といい、「起居のけはひたへがたげに行ふ」というのだから、白詩が、

歯堕雙眸昏……金章腰不勝　傴僂入君門

とするのとも共通する。共通性は見かけより強い。

その上、すぐ後に、

長生殿の古き例はゆゆしくて、翼をかはさむとはひきかへて、

と白楽天の「長恨歌」を引用するから、ここも同じく文集を意識し

た表現と認めてよいであろう。

それにしても源語に文集を引用する効果があったのだろうか。夕顔が住む世界は庶民の町であり、「金章腰不勝　傴僂入君門」といった金章など持つはずもない。「誰不愛高貴　誰不恋君恩」といっても、愛し恋すべき高貴も君恩も持っていない。不致仕の権勢志向者とは無関係だと思える。

しかし、白詩を導入すると「不致仕」の老人は陋巷の御岳精進の老人と一致することとなる。歯が欠け落ち、両の眼はもはやしょぼしょぼと見えがたく、背をかがめて往来する不致仕者は、陋巷の中で早朝から仏名を唱え、あげくの果によぼよぼとなる老人と同じだと、源語の作者は感じたのである。逆にそんな老人の姿を、白詩の愛読者につきつけて来たのである。白詩の愛読者が高貴者、不致仕者になりかねないことは、いうまでもない。

七　不致仕―行幸

「不致仕」引用の第二と思われるところは「行幸」の一節である。

齢などこれよりまさる人、腰たへぬまで屈まり歩く例、昔も今もはべめれど、あやしくおれおれしき本性に添ふものうさになむはべるべき。

この「腰たへぬまで屈まり歩く」がそれだが、その例がよくあるといわれているように、必ずしも白詩に限らないとする考えであろう、参考として「不致仕」を掲げない研究者もある。水野、古沢、丸山三氏は引用とするが古典全集本ではこれを掲げず、『岷江入楚』の太公望その他とする説をあげる。

しかし右の文に先立って光源氏は内裏への参内を話題にしており、単に腰を屈める者のみを問題とするのではない。

内裏などにも、ことなるついでなきかぎりは参らず、朝廷に仕ふる人ともなくて籠りはべれば、よろづうひうひしう、よだけくなりにてはべり。

もちろん源氏はこの時太政大臣で仕えているが、右だけをよむと致仕したのと同じように参内していないことになる。だから先にあげた本文のように、自分の今の年齢以上の人でも腰をかがめて参内する人がいるのに、自分は「おれおれしき本性」と物憂さから参内しないのだといいわけをせざるをえない。「齢などこれよりまさる人」とは八、九十歳の人のことでもあろう。

まるで光源氏は精神的に致仕するほどの老齢に達しているかの如き口吻であり、その上でのこうした参内の有無、可否は、まさに「不致仕」の筋にそうもので、その中で屈まり歩く人をあげるのだから、「不致仕」を意識した文章だと考えてよいであろう。

ところで、この光源氏のせりふは内大臣の母大宮を病床に見舞った折のもので、二月一日のこと、それから一と月余り三月二十日に大宮はなくなってしまう。この見舞の段階でも、もしなくなること

があれば玉鬘の裳着が先送りになってしまうだろうと危惧しているほどであり、源氏自身も「世もいと定めなし」と思っているなど、まわりは灰色につつまれている。いや玉鬘裳着の腰結役を内大臣に依頼する件、夕霧と雲居雁との結婚問題など、光源氏の周辺には難問がまといついており、けっして精神的に明るい情況ではなかった。

時に源氏三十七歳。白詩のいう七十歳の致仕が『礼記』にあるとか、八十九十歳でも仕えているものがあるとかといった中国ふうとは段ちがいに若いが、日本ふうにいえば四十の賀が一つの区切りだった当時である。事実、源語は三十九歳の「藤裏葉」をもって一往の収束をつけているようだし、四十歳以後は少しずつ翳りを深めてゆく。それは柏木事件をピークとする。出家を志したのも三十九歳の時である。

こうした流れから考えると、今、死の直前にある大宮を前に光源氏自身が老の予感を抱いていたらしいことが明らかであろう。そんな心境の中で光源氏自身が「不致仕」を念頭に浮かべ、あれこれと考えていたのだと、読者は知らされている。致仕すべきか否か、その迷いを裏側にまといつかせながら読むことを、この引用は強いることになる。

そう考えると、潔い進退を源氏が考えつつ、心も身もつかれてとかく籠居しがちだった状態、外出しないことがかえって美徳ですらある状態がよくわかる。もし外出すれば太政大臣として「貪栄者」と見られ「朝露貪名利　夕陽憂子孫」、翠綬（冠の紐）や朱輪に未練をもつ姿と映る。高貴、君恩を欲して「晩歳多因循」する者の一人となる。

朱輪についていえば、先立つ野行幸の盛儀に人々が競い立ち、

かすかなる脚弱き車など輪を押しひしがれ、あはれげなるもあり。

とあって、そうした下賤の車輪と対照的なものが朱輪だから、右の一行は伏線のようにすら読める。

もちろん源氏周辺の先人たちは大体六十歳をすぎて致仕している。それも源氏が知っていると思いつつ読者は「不致仕」を思い浮かべている源氏を目で追っているのだから、その年齢からいえば、

少時共嗤誚　晩歳多因循

という二行がクローズアップしていたかもしれない。年若いという点からいえば老人の固執を嗤誚する立場にある。しかしそれはやがて自分もそうなることに気づかないだけだから、気づいてしまった以上、源氏はけっして嗤誚などしていない。自分も「晩歳多因循」する一人となるのかと思いつつ、十分老の衰えを予感しつつ、しかし冠を挂けることがないままに物憂く過ごしている自分を、光源氏は見つめていたことになる。

いやその上に玉鬘や夕霧の世俗のことがある。世俗に浸りながら、「不致仕」に発せられた老醜をいやという程知りながら、大宮の病

床に向かう光源氏像を、源語の作者は描き出したのである。

八　不致仕―若菜下

「不致仕」第三第四の引用個所は「若菜」下の二か所である。まず冒頭近く、冷泉帝が譲位し、これにつれて太政大臣が致仕する。

太政大臣、致仕の表奉りて、籠りゐたまひぬ。「世の中の常なきにより、かしこき帝の君も位を去りたまひぬるに、年ふかき身の冠を挂けむ、何か惜しからむ」と思しのたまひて、……

もう一つは朱雀院の五十の賀を催すにつけての試楽の折、柏木が源氏のもとに参上して物語りする中に見える。

院の御齢足りたまふ年なり、人よりさだかに数へたてまつり仕うまつるべきよし、致仕の大臣思ひおよび申されしを、冠を挂け、車を惜しまず棄ててし身にて、進み仕うまつらむにつく所なし、げに下薦なりとも、同じごと深きところはべらむ、その心御覧ぜられよ、ともよほし申さるることのはべりしかば……

これも該当部分は致仕大臣のことばである。

ただ、この個所についても「不致仕」を指摘しない説のあることはすでに述べた。たとえば古典全集は前者について『後漢書』逢萌伝に見える、逢萌が王莽に仕えることを忌避して冠を東都の城門に挂けて逃れた故事を引き、後者については『孝経』の「七十ニシテ老イテ致仕シテ、其ノ仕フル所ノ車ヲ懸ケテ諸廟ニ置ク」をあげ、漢詩文に多いとする。

こうした「不致仕」以外をあげる説はすでに古く、前者は古沢氏があげたものであり、後者は『河海抄』が、

古文孝経曰、七十老致仕懸其所仕之車置諸廟

とあげた。

しかしこれらの出典については、古沢氏（六二ページ以下）が「不致仕」とすべきことを論じ、それに従うべきであろう。氏が根拠とするところは四つで、㈠文節の内容や要素が「不致仕」にふさわしいこと。㈡挂冠と懸車がともに一文に存すること。㈢「不致仕」からの引用が源語の他巻にも見られること。㈣源語全般に諷諭詩の引用が多いこと、である。とくにすぐれた指摘は㈠で、他の出典にくらべて「顧翠綬」とか「惜朱輪」とかと愛情、執着の語のあることが源語の「何か惜しからむ」「惜しまず」らと符合するというのである。

さて、このように白詩「不致仕」を裏側にひびかせながら太政大臣が致仕したとなれば、彼の行動はまことに爽やかである。前者、冷泉院退位の折の部分は源語として珍しく四年の空白をおいた後のところで、まるで馳け足のように帝位の交替、立太子、そして左大将鬚黒の右大臣昇進、また夕霧の大納言昇任という人事が告げられる。その内の一つが致仕である。こう筆を急がせすぎたからかもしれぬが、致仕はまことにあっけない。

しかし理由はきちんと述べられていて「世の中の常なき」こと、そのことによって天皇が退位したこと、そしてまた「年ふかき身の」というのによれば老齢であることの三つである。第一の「世の中の常なきこと」とは病、死の予感などであるらしい。冷泉帝のいうところ、皇子もおらず、何かと華やぎも覚えない上に世の中がとるに足りないと思うようになり、その上病も得た、というのである。いわば世の無常といってよいか。そこから親しい人々ともむつまじく余生を送りたいと思ったのが退位の原因であった。

太政大臣はこれを理解できたと見える。そのことへの共感も「かしこき帝」の一部だったであろう。人間として生きることを欲した（私ざまに心をやりて、のどかに過ぐさまほしくなむ）ゆえの退位に共鳴する致仕と思える。

この心情は「不致仕」で賞揚された漢の二疏と通ずるものであろう。疏広伝によると功遂げて身を退くのは天の道であるといい、病気と称して致仕したという。右にのべた心境を、天の道にめざめたものということはできないだろうか。

源語の作者は「不致仕」と反対の行動を太政大臣にとらせたのだが、この行動の原理は二疏にあったと見える。

もう一か所、五十の賀の折のものは柏木から間接に語られる太政大臣の心境だが、朱雀院の慶賀すべき齢を「人よりさだかに数へたてまつり仕うまつるべきよし」をわが子にしっかりといいつけたという。そしてまた、自分がすべきところ自分は致仕したからお仕えすべき「つく所なし」という。これも分をわきまえた思慮であろう。そしてさらに、だからお前も同じ心をもつはずの身、自ら深い志をお見せせよ、という判断も正しい。

これらを集約することばが冠・車という権勢のシンボルを「惜しまず」というものであろう。因循しない心である。

さてそうなると、当然引合いに出されざるをえないのが源氏であろう。源氏はかつて「不致仕」を引いて語られた時、同じ太政大臣であった。そして致仕を精神的に受容しながら、逡巡しつつついに致仕することはなかった。いや致仕するどころか、今や太上天皇に准じた扱いをうけるに到っている（藤裏葉）。あの「不致仕」引用段から二年後のことであった。当面の太政大臣はその後を襲ったものである。逡巡しつつ栄誉を離れなかった源氏、さっさと天の道についた太政大臣。

太政大臣とはいうまでもなくかつての頭中将であり、源氏との二人のからみ合いは、源語の大きな柱であった。その中で作者はつねに一歩先んじる人物として源氏を歩かせて来た。現に源氏が太上天皇に准ぜられるというのもその一つだが、しかし今、この致仕と不致仕との間に、はっきりと逆の明暗を作者は施したのではなかったか。

のみならず、まさに今、源氏は目の前の柏木を陰の濃い心理でさ

いなんでいる。さいなみつづけ、遂に死に到らしめる。反対に太政大臣の名代としての柏木は、その責苦を十分承知しつつ、病をおして源氏の前に現われ、堂々と父の心境を語った。心の鬼にさいなまれる不致仕者と、わが子自身の心の鬼を解放してやろうとする致仕者と、その対蹠が余りにもくっきりとしている。そこに源語作者の、大きな人生への透視があるように思えてならない。

九　不致仕―夕霧

「不致仕」引用を思わせる最後は「夕霧」の一節である。一条御息所の死後、その法要のことなどを源氏と夕霧が語るところで、次のように源氏がいう。

御息所の忌はてぬらんな。昨日今日と思ふほどに、三年よりあなたの事になる世にこそあれ。あはれにあぢきなしや。夕の露かかるほどのむさぼりよ。いかでこの髪剃りて、よろづ背き棄てんと思ふを、さものどやかなるやうにても過ぐすかな。いと悪きわざなりや。

この「夕の露かかるほどのむさぼりよ」が「不致仕」の例の「朝露貪名利」に相当するというのである。白詩と朝・夕の相違をもつことについては、たとえば古典全集本など、「原詩の一部をかえて引く例はほかにもある」として、「柏木」の巻の「右将軍が塚に草初めて青し」をあげる。原詩（紀在昌、本朝秀句所載。河海抄）は「初秋」である。同様の例として有名なものは「長恨歌」の「霜華重」を「霜華白し」としたものであろう（葵）。

さて、右の引用部分は死後の歳月が早いことを嘆きつつ命をむさぼることをいい、改めて出家したいと思うもののやはりのんびりと過ごしてしまうという自省をのべたものだから、「不致仕」とさほど関係はないように見える。「夕の露かかるほどのむさぼり」など、ありふれた表現ともいえる。

しかし、この源氏のことばに対して夕霧が、

まことに、惜しげなき人だにおのがじしは離れがたく思ふ世にこそはべめれ

と答えるところを見ると、これは「晩歳多因循」だから、両者の間には対応が見られるであろう。

しかも先にあげたように「夕顔」の中に同じような引用を作者はしている。三十三年がたってはいても、晩年の源氏をこれと対応させようとする意識は、なかったともいえない。

そこで「不致仕」はどのような役割をもって引用されたのだろう。単に人生無常といいたかっただけなのであろうか。

それを考えると夕霧がつづいていうことばが気になる。

御息所の四十九日のわざなど、大和守なにがしの朝臣独り扱ひはべる、いとあはれなるわざなりや。はかばかしきよすがなき人は、生ける世の限りにて、かかる世のはてこそ悲しうはべり

けれ。

一条御息所は、いやしくも朱雀帝の更衣だったから、四十九日だって盛大に行なわれてもいいのに、大和守なにがししか、これをしようとする者がいない。それも更衣がそれほどよい出ではなかったから「はかばかしきよすが」がないためである。そういう場合は生きている世の間だけのことであって、死んでしまえばみじめなものなのである。

この論理は「不致仕」の世俗への執着を容認するものであろう。死を致仕に代えると、右はそのまま「不致仕」にあてはまる。権勢についている間だけがよくて、もうやめてしまえばみじめなものだ、ということになるではないか。

夕霧はこれを認め、また世への執着を肯定した。先のことばによると捨てても惜しくはない人だって世を離れがたいというのだから、権勢のある者が執着するのは当り前だと考えるのである。

こうした考えで対応したのが、源氏のむさぼりである。逆にいえば源氏のむさぼりは「不致仕」の筋によって夕霧に認められたのだった。「不致仕」の筋に沿って物語が造られた痕跡でもあろう。

ただ、私はここに存在する変容もまた大きいと思う。すでに朝を夕に代えたことを話題としたが、代えるには代えるだけの理由があったはずで、その解明を持たずに両者を比較することは不十分であろう。

とくに「夕の露かかるほどのむさぼり」は、朝を夕とかえた「夕露ニ名利ヲ貪リ」とは意味が大きく違う。白詩は夕方の露のようにはかない人生において、名利をむさぼるという意だが、源語は「夕方の露がかかるほどにはかない人生だのに、その命をむさぼっている」という意味ととれる。むさぼるものが、根本的に異るのである。

話題も四十九日のことである。源氏の願望も出家にあり、生への執着を捨てることであって、地位や名誉、利益を捨てようというのではない。

こうしてみると、源語の作者は意図的に「朝露」を「夕の露」といい、一層人が無常を感じるものに代えたと思われる。そのことによって権勢、名利への執着という本来の主題を、生命への執着へと転換せしめることが、不自然でなくなった。もちろん基本には原詩があるのだが、その筋を他の条件の中に移しかえる試みを、作者はしたのであろう。変容の引用とでもよべばよいか、それは引用句の原典をオーバーラップさせる引用とは、また別の引用方法であった。

一〇　五絃―手習

「五絃」とは文集巻二にのせる諷諭詩だが、「新楽府」に収める詩にも「五絃弾」があって、この方には「悪鄭之奪雅也」とある。内容的にも両者はほとんど一致するから、「五絃」も俗悪な鄭音が流行して、古楽の雅を奪ったことを諷諭したものと考えることができ

る。

詩は、清歌、紅袂が歌舞をやめ、新たに五絃琴の名手として登場した趙叟が五絃を胸にしては声さまざまに奏し、そのさまは時として霰の如く風雨の如く、また切々として鬼神の物語る如くである。たとえば鵲や猨の鳴き声に似ていようか。十本の指も動かし方は自在、音調もこだわらない。だからこれを聞く者は心身ともにそぞろとなり、思うように行動することすらできない、という。

白楽天はそう描写しておいていう。

嗟々俗人耳　好今不好古　所以緑窓琴　日々生塵土

と。だから先に描写した様子は、実は悪むべき俗人の好みだったこととなる。

さて、この「五絃」を引用したとする説が『河海抄』に見える。後には丸山氏が賛成するが（永野、古沢、大系、全集諸本ふれず）、該当個所は「手習」の巻である。

この巻で横川僧都一行に浮舟が救われた後、妹の尼の許で日を送り、中将に懸想されるようになることはよく知られているが、ある月夜、中将がおもしろく笛を吹いていると、母の大尼君も中将や尼のいるところへ出てくる。そして中将の笛を尼がほめて、さて自分は、

「いでや、これはひがことになりてはべらむ」と言ひながら弾く。今様は、をさをさなべての人の今は好まずなりゆくものなれば、なかなかめづらしくあはれに聞こゆ。松風もいとよくもてはやす。

この部分の「今様は、をさをさなべての人の今は好まずなりゆくものなれば」が、白詩の上掲句と一致するというのである。

すでにふれたように『河海抄』の指摘は必ずしもすべての学者に踏襲されてはいない。それなりの理由は、古風なものが好まれないのが今様だとする、きわめて一般的な表現にあるだろう。

しかしここでは同じく琴をとり上げて今様好みをいうのだから、話題が近い。その上「今は好まず」とあって、白詩の「好今不好古」と対応する。別詩の「五絃弾」では、ここに相当するところが、

人情重今多賤古　古琴有弦人不撫　更従趙璧芸成来
二十五弦不如五

とあり、ことば遣いがまるで異る。また、白詩の末句「緑窓琴日々生塵土」は大尼君が近ごろ「弾きはべらぬなり」といいながら「さるは、いとよく鳴る琴もはべり」というのとひとしい。それらの点をもって『河海抄』の説は支持すべきであろう。

すると「五絃」と「手習」はどのように重ね合せられているのであろう。

まず「手習」を読んで感じることは、大尼君の姿態が、あまりにも熱心に語られることである。そもそも登場するところから、

笛の音をほのかに聞きつけたりければ、さすがにめでて出で来

たり。

とある。そして当該の一挿話の終るところは、

これに事みなさめて帰りたまふほども、山おろし吹きて、聞こえ来る笛の音いとをかしう聞こえて、起き明かしたる。

と閉じられる。この照応する首尾の中に、まるでそのことをだけ主題として語られるものが大尼君であり、その古風な弾琴である。大尼君、齢八十あまり。

その描写とは、無残なまでの老醜への皮肉である。まず登場するや否や、

ここかしこうちしはぶき、あさましきわななき声にて、なかなか昔のことなどもかけて言はず。誰とも思ひわかぬなるべし。

とある。末尾は、かつて中将が尼の、今はなき娘の婿だったことさえも忘れているという意である。

それに対して「このような人がどうして籠っていたのだろう、定めなき世だ」と中将が思ったというのは、まるで生きているのがふしぎな口ぶりである。人間扱いしていないとさえいわれかねない。

やがて大尼君は、昔、和琴をよく弾いたが「今の世には、変りたるにやあらん」、僧都がやめよというので今は弾きません、それにしても音色のいい琴がございます、という。いうまでもなく弾きたいのである。そしてそれはいち早く中将から察知される。「すか」されてしまうほどに。

そういう間も「咳は絶えず。人々は、見苦しと思へど」、僧都が弾かせなかったと怨めしげにいうものだから、「いとほしくて」やりたいようにやらせる。すると笛の音にはお構いなし、弾きたいように弾き始める。仕方なく他の者はみな手を休めるが、すると自分の琴を皆がほめていると思い込んで、手もはずませて弾くのだが、ことばはやたらに古い。

中将が「いとをかしう、今の世に聞こえぬ言葉こそは弾きたまひけれ」とほめる。これもまた馬鹿にした話だが、大尼君は耳が遠いので傍の人に尋ね聞いては、

今様の若き人は、かやうなることをぞ好まれざりける。……といい、浮舟はこんなことをしないといっては「われ賢にうちあざ笑ひて語る」。どうも聞きづらいことばかりで、すっかり興ざめしてそれぞれ帰ってゆくこととなる。帰りぎわに奏する笛がまたすばらしいと書き添えるのは、徹底した揶揄であろう。

この、痛烈な老残者への揶揄は、また何としたことであろう。大尼君の老醜は他の個所にもあるが、特にここは和琴を弾く古めかしさについて語られたもので、極言すれば、古い楽器が和琴にせよ琴にせよ老醜と分かち難いものだとさえ言いたげである。人間の老醜は古楽の老醜でもある、と。しかしそれを、自分から今時の若い者はこういうことを好まない、ということにおいて、老醜は極まる。

たしかに古楽はもはや魅力のないものであろう。この源語の主張

を一つ、聴かなければなるまい。

しかし、必ずしもそれがすべてではない。というのは、当の「今様は、をさをさなべての人の今は好まずなりゆく」が、そのために今妹の尼の弾いている琴が、

なかなかめづらしくあはれに聞こゆ。

というのだから。しみじみとした調べは古風なものの中にある。また古楽はそのゆえに珍しい。

おそらくこの段で源語の作者がいいたかったことは当世の人が好まないという古楽の二つの面だったのであろう。当世の好みではないということばの中には、だからだめだという意味と、だからよいという意味との二面がある。それを主張するのだとすれば、源語はまことに見事に二つ、同じようなせりふを掲げている。

今様は、をさをさなべての人の今は好まずなりゆくもの……

今様の若き人は、かやうなることをぞ好まれざりける。

前者はよい場合に、後者が悪い場合に用いられた。

「五絃」との対応は『河海抄』のように、前者だけにいうべきであった。しかし古楽には、口をきわめて源語がからかったような古めかしい醜さがある。「五絃」が一途に新楽をそしり、古楽をよしとしたのは、いささか片手落ちであった。

したがって源語は白詩を引用しながら、その一面性を批判したともいえる。古楽がそれなりの時代遅れな滑稽さをもち、一概に新楽好みが批判されるべきではないという、白楽天への抵抗が、源語作者の胸中にあったと見たい。考えてみれば白詩の趙叟の姿はいかにも爽快としている。その辺りも、源語作者はきちんと読みとっていたのではなかったろうか。そのことは、「五絃」を知っている源語の読者にとってごく自然なことだったから、むしろ源語のこの語り口は、耳になじみやすかったであろう。

一一　海漫々—胡蝶

白氏文集は巻三を迎えると「新楽府」と名づけられた諸篇が登場する。元和四年（八〇九）、白楽天三十八歳の作だが、その第四が「海漫々」と題される詩である。諷諭詩として「戒求仙也」と注がある。

一篇の大意は漫々と広がる海は底にも四方にも涯がないが、雲霞のもっとも深いところに三つの神山があり、山上の不死の薬をのめば羽化して天の仙人になれるという。秦の始皇帝や漢の武帝はこれを信じて方士を派遣したが、蓬萊は名前だけで、広がる海の中に求めようがない。海は広く風は強く、いくら見つめても蓬萊島はない。見ずば帰らじと思っているから年少者たちも舟の中で年とってしまう。徐福や文成はうそばかり、上元・太一への祈りも空しく始皇帝や武帝は死に、その墳墓には風が吹き雑草がおいしげっているではないか。老子は薬があるとか仙人になるとか、天に昇るとかいうこ

とは、けっしていわない、という詩である。

さて、その中に、

童男卯女舟中老

という句があり、これを源語が利用しているとされる。「胡蝶」の巻はすでに「傷宅」との関係で登場したが、「廊を繞れる藤の色」のくだりがあり、終日舟遊びにすごしたことを語った後に、作者は四首の歌をそえる。

風吹けば波の花さへいろ見えてこや名にたてる山ぶきの崎

春の池や井手のかはせにかよふらん岸の山吹そこもにほへり

亀の上の山もたづねじ舟のうちに老いせぬ名をばここに残さむ

春の日のうららにさして行く舟は棹のしづくも花ぞちりける

この第三首に対して『眠江入楚』は、

蓬萊山負鼇背也

白氏文集不見蓬萊不敢帰童男卯女舟中老

秘文集の句を引こゝの心は不老不死の薬は此六条院也何別に覓蓬萊哉と也

という。これは『一葉抄』『孟津抄』も同じである。

「亀の上の山」は「海漫々」には見えず、これは『列子』（湯問篇）のことばだが、「舟のうちに老いせぬ」は上掲の白詩の一句「舟中老」と話題がひとしい。「老いせぬ」と「老ゆ」とでは全く逆ではあっても、老・不老を問題とした点は共通するし、特殊な話題なので、この点は十分考慮すべきであろう。

のみならず「海漫々」は『紫式部日記』の中に見える。寛弘六年（一〇〇九）九月十一日、仏事のあと殿上人が舟に乗って戯れる中に老人の大蔵卿（藤原正光）がいたので、

しのびやかにてゐたるうしろでの、をかしう見ゆれば、御簾のうちの人もみそかに笑ふ。

とあり、それについで、

「舟の中にや老をばかこつらむ」といひたるを、聞きつけたまへるにや、大夫、「徐福文成誑誕多し」と、うち誦じたまふ声も、さまも、こよなういまめかしく見ゆ。

と記される。源語の作者を同一と見ての話だが、いかにも似たような着想であり、こちらは「海漫々」の直接の口吟である。それも先立って舟中の老を口にしたので、これを「海漫々」の一節と知っての即答だから、白詩を承けて出来上がった問答である。

こうしたことを傍証として「胡蝶」の部分も「海漫々」を踏まえたものと考えて、よいであろう。これは、すでに「傷宅」との関係で見た、この段の唐ふうの一つの仕上げのためのものでもあった。

考えてみると、歌は四首である。作者は一人か四人か、『一葉抄』によると、「此哥ともハ中宮紫の御かた〳〵の女房ノ哥也」とあり、歌の後に「心々に言ひかはしつつ」とあるから四人の歌とされているが、それを四首としたのは、ここに絶句の趣向が働いていたから

ではなかったか。四首は起承転結をなしているのではないか。

第一首は岸べに山吹が咲いていることから水にうつる金色の花が、池の風の波によって映発するから、これこそ有名な「山吹の崎」かと戯れたのに対して、第二首は岸の山吹が底まで咲きみだれているなら、井手の川瀬に通じているのだろうと応じた。前者が「山崎」かと地名を出したのに対して別の「井手」という地名を出したのである。

ところがこうした継承とちがって、第三首は別のことを歌う。くり返し見て来たように蓬莱山を求めず、この舟の中にこそ不老の名をとどめようというのだから、ここは一転したと見られる。

これに対して第四首は前歌を承けて舟を素材とした。その上でさらに棹のしずくに花が散るイメージを求め、第一、二首で問題とした花へと、話題を返している。

これらは見事な起承転結というべきだろう。この技巧が、巻首からくり展げられた唐ふうのしめくくりであった。

さて、その転の中に、実は問題の不老が語られる。ところが白詩が老であって逆になることはすでに問題とした。この関係をどう考えるべきか。

白詩が「童男丱女舟中老」というのは「不見蓬莱不敢帰」と思うからである。したがって「老いず」といえば蓬莱山を見たことになり「舟中に」どころか山に登って永遠の生命を手に入れることになろう。源語が「老いせぬ」というのは、蓬莱山を見たからだと考えなければならない。

すなわち、今目前にするものが蓬莱であり、そのことによって「老いせぬ」身となると、この歌は語るのである。しかも意志によって「残さむ」という。この意志は「尋ねじ」という意志と併行している。蓬莱を尋ねる必要がないと考えるからである。

歌で「ここ」というのは、今いる所、六条院の春の町のことだ。それは蓬莱にとって代るべきもので、ここでこそ不老の名を残そうというのだから、ここが蓬莱だということである。

これは白詩の「戒求仙也」を実践したことになる。まこと「徐福文成多誑誕」であった。そしてこのことは、実は上述の『紫式部日記』とまったくそっくりである。情況としては日記の方が九月（『御堂関白記』の中宮御修善結願の日とする説に従う）、その月夜であり、物語の三月の昼とは異るし、日記はよほど文飾を節してはいるが、土御門邸の池に舟を浮かべて、公達どもが華やかに舟遊びをして今様などを歌っており、その中で藤原斉信が「徐福文成誑誕多し」と口ずさんだことは、「いや大蔵卿とて老を嘆きません」というだけではなく「ここそが蓬莱だから、大蔵卿が老をかこつ必要はないのです」という意味である。その賞辞によってこそ斉信の即興と教養とがすばらしかったということになろう。中宮への賛美の言であった。

当の「胡蝶」の巻においても、この構想がそのまま用いられていると考えられる。源語の執筆が日記の寛弘六年より後とすれば、斉信の行動をモデルとして和歌がつくられたことになり、理解しやすいが、逆と考えると、果して斉信はそう口ずさんだのか否か。源語を知っていて口吟したと考えるか、口吟は紫式部の虚構だったと考えるか、まことに興味ぶかい。

しかしそれは本題ではない。要するに六条院を蓬萊と見たてるために協力を要請されたものが、「海漫々」という諷諭詩の、しかも諷諭の部分であった。世上、白詩の諷諭が日本に受容されなかったという説もあるが、虚妄である。

そして、ここを蓬萊とすると見る観方は、すでに早々と行なわれている。「此六条院のありさま、人間には比量すべき所なければ、只仙宮の如しとほめて云る也」というのが『眠江入楚』の言であり、その深意を、和歌につづく、

行く方も、帰らむ里も忘れぬべう

という表現から読みとったのは、「忘る」ということばが宴席の慣用語だとしても、見事だといえる。「行く方、帰らむ里」というのを蓬萊だとすれば「海漫々」に、

蓬萊今古但聞名

というのに相当する。

源語の作者は、この「胡蝶」の冒頭をどのような過程によって作り出したであろうか。とくに「龍頭鷁首を唐の装ひにことごとしうしつらひて」以下和歌の前、「日を暮らす」までは、二度までも、

ただ絵に描いたらむやうなり。

物の絵様にも描き取らまほしき。

というように、まことに絵画的である。そこから逆に忖度すると、作者は絵を見ながら描いたのではないかと思われる。その絵は蓬萊山の絵ではなかったろうか。

霞こめた梢、柳、桜、藤、そして山吹。ことに花喰鳥を思わせる「細き枝どもをくひて飛びちがふ」水鳥、また鴛鴦。もとより多少の加減はあるにせよ、蓬萊の絵による描写と思わせる節がある。

それはここを蓬萊だとする筋から採用された手法で、この構想をもっとも明らさまに語る一首が、今問題とする第三首だったと思われる。

注

1　文中略称をもって引用した諸書は、次のごとくである。

㈠大系本　山岸徳平校注『源氏物語』（日本古典文学大系）　岩波書店　一九五八年―一九六三年

㈡古典全集本　阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』（日本古典文学全集）　小学館　一九七〇年―一九七六年

㈢古沢氏　古沢末知男著『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』桜楓社　一九六四年

(四)丸山氏　丸山キヨ子著『源氏物語と白氏文集』東京女子大学学会　一九六四年

(五)水野氏　水野平次著『白楽天と日本文学』（復刻版）　大学堂書店　一九八二年

(六)林田孝和氏　林田孝和著『源氏物語の発想』一一五ページ以下。桜楓社　一九八〇年

(七)高崎正秀氏　高崎正秀著『源氏物語論』（著作集第六巻）　桜楓社　一九七一年

(八)吉沢氏　吉沢義則著『対校源氏物語新訳』　平凡社　一九三七年—一九四〇年

2　文中引用した本文は、次のものによる。

(一)『源氏物語』　阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』（日本古典文学全集）　小学館　一九七〇年—一九七六年

(二)『紫式部日記』　中野幸一校注・訳『紫式部日記』（日本古典文学全集）　小学館　一九七一年

(三)『白氏文集』『白氏長慶集　上下』（長沢規矩也編『和刻本漢詩集成』）　汲古書院　一九七四年

(四)『岷江入楚』　中田武司編『岷江入楚』（源氏物語古注集成）　桜楓社　一九八〇年